

無名碑

無名碑

曾野綾子

講談社

無名碑

昭和四十四年十月三十日 第一刷発行
昭和四十六年二月八日 第五刷発行

著者 曾野綾子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二

郵便番号 一一二

電話東京(九四五) 一一一一(大代表)

振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社大光堂

定価 六二〇円

落丁本・乱丁本は、おとりかえいたしません。

© Ayako Sono 1969 Printed in Japan

0093-123392-2253 (0) (文1)

目次

第一章.....5

第二章.....182

第三章.....284

あとがき.....440

装帧
枡折久美子

無 名 碑

1

第一章

1

三雲竜起は、背骨を刺すような寒さの中で、米軍の放出衣料の市で買って来た防寒ジャンパーをはおってから、忘れ物はないかと、あたりを見廻した。古雑誌の山、空鏢、壁にはりつけた女優の写真のついたカレンダーなどが残っているだけで、手に持つべき荷物はひとつしかなかった。本来なら、久しぶりの上京に備えて、ここのとこざつと年に一、二回しか着ることのなかった背広を着て行くところである。しかし作業服ばかり見なれた眼に背広は何ともよそよそしく、竜起はそれを畳んで、外出用の短靴と共にしまいこんだのであった。

まだ寝ている人々の目を覚させないように、急造の宿舍の廊下を踏んで、三雲は外へ出た。夜勤の者が現場から上って来る時間にも早い。長靴をがばがば鳴らして駐車場に

あてられている空地へでると、まだ明け方の気配はなく、雪でほの白い荒島岳の稜線近くに、線描のように細くきりと輪郭の際立った上弦の月があった。そのすぐ肩の所に見える牡牛座の赤いアルデバランも三雲竜起にとって馴染深い星であった。信じられない偶然ではあるが、彼は二人一部屋の宿員宿舍の壁の隙間から、或る夜、寝ながらこのアルデバランを見つけたのであった。もともと杉皮葺の粗末な屋根だったが、星が見えるとは、何というひどい建て方だ、と思った。これでは、吹雪の日には、部屋の中に雪が降り込むじゃあないか。飯のまじいことや、宿舍の設備の悪いことに關しては、会社側に文句をつけるのに人並みに必らず加担する竜起であったが、この星の件だけは、遂に最後まで誰にも言わなかった。その星は誰から見えてという訳ではなく、偶然に自分と視線があった時だけとすれば、それは、かなり宿命的な出会いであり、しかも羽目板から星が見える、などという言葉づかいは、あまりに柔かすぎて、組合の集りで話し合う問題としては笑い話になる恐れもあった。そのいわば親しみをこめ続けて来た星が、今、三雲を見送るように背後にあった。十一月初めに翼が降り始めてから、低く垂れこめたままの雪雲がこの冬の未明、ほんの一瞬、人々の知らぬ間に奇蹟的に晴れ渡っているのだった。

工事事務所に附属したバラック建ての診療所の前の、一

つだけ灯った裸電球の下で、機械部の水田が、米軍払いさげのジープのエンジンを始動させているところだった。

「水田さん悪いね、朝早くから」

「いやあ」

軍手をはめた手が、凍えていて自由がきかないのか、水田はチェーンを引くために、右の手袋を取った。すると脚を電氣用の黒いゴムテープで巻いた脂気の抜けた古皮のようにこわばった掌がむき出しになった。

「荷物はたくさんありますか」

「これだけです。今、積みますから」

トランクの枠が、ジープの床に当って鈍い音をたてた。

水田はジープの座席の下から汚れたタオルを探し出して来て、凍えをかんた。そのタオルの半分は、コンクリートがこびりついて、かちかちに固くなっていた。

水田は運転席の隣に散らかっていた紙類を、三雲のために片づけた。「作業建設」と胴体に名前を書きこまれた会社のジープは、すでにエンジンの震動で小刻みに震えている。チェーンをつけた轍の下に、泥と油脂で練り固められた雪が点々と散らばった。車に乗り込む前に、ほんの一時、三雲竜起は、宿舎とその背後に連なる現場の全景を、もう一度脳裡に刻みつけようとしてふり返った。完成したばかりの五条方水力発電所の二本の鉄管路が、雪の斜面に微かな銀灰色に光りながら傷跡のように残っていた。かつ

てここは何もない静かな山の斜面であった。真名川は、九頭竜に注ぎこむ穏かな優しい流れの一つに過ぎなかった。

それを人間共がむりやりに地下の水路におしこめ、発電所の真上から二本の鉄管によって落し、一万七千五百キロワットの発電器を動かしているのだ。竜起はふと自分は阿漕なことをした、と思った。それと同時に、彼は破壊的な欲求が身内に走るのを感じた。

今この完成したばかりの発電所を一瞬のうちに爆破できたらどんなに爽快であろう。真名川の水は再び自然の水路に還り、山の斜面には人工の傷跡もなく雪が降りつもる。三年半の悪夢は過ぎて、自然は再び眠りに帰る。

三雲竜起は車に飛び乗った。水田が車をバックした。これから越前大野まで、約八軒の距離である。

「今夜には東京ですか」

水田は少しばかり羨しそうな声を出した。

「鶴来に祖母さんがいるんでね。そこへ寄って行こうと思うんだけど、水田さんも東京？」

「いやあ、自分は静岡です。暖くて明かるい土地だからね、雪の降るところはもうまっ平だと思ったけど、今度も又、神通の方へ行かされるらしいけどね」

「僕も、東京にいられるのは暫くだと思ふよ。今度はどこかなあ」

三雲は煙草に火をつけ、ヘッドライトの中に切りとった

ように捕えられる重々しい雪道の光景を見つめた。

「僕は藁靴はいて、よくこの道を歩いたよ」

「いつか上庄の小学校で野球の試合をしましたね」

水田は思い出したように楽しげに言った。彼の白い歯が計器盤の僅かな光の中で鮮かに光って見えた。

「あの時は、機械屋さんたちにやられてさんざんだった。だけど、ひどかったのは、校庭を借りた御礼に皆で草むしりに行った時だったでしょう」

「あれは暑かったです。臍へそのまわりに汗疹あせもができたからね」

その上庄の杉木立に囲まれた小学校のあたりまで来た時、初めて東の空は僅かに白み始めた。しかし風は電線を鳴らし、両側の、まだ眠っている民家の屋根からも、新雪を白煙のように吹きつけて寄こした。

「さあ、今日も又、吹雪くぞ」

水田が独り言のように呟いた。彼の言う通りだった。北陸には、まだ春の気配はどこにもなかった。

福井駅のホームに立ってからもお、三雲竜起は鶴来の祖母を訪ねようか迷っていたが、それは後になって考えてみると、彼の運命を決める大きな別れ道になったのである。

もしそこに、金沢行きの汽車が台車に白雪をこびりつけて時間通りに入って来なかったら、彼は十分後に入って来

る筈の米原行きに乗って西廻りで、東京に帰ってしまっただかも知れない。そしてもし、彼が西廻りの道をとっていたなら、彼は、彼のそれからの生涯に大きな係り合いを持つ二人の人物とも会うこともなかったのであった。

金沢行きの列車が定刻に入って来たために、彼は予定通り鶴来の祖母を見舞うために汽車に乗りこんだ。

三雲竜起が、祖母を訪ねるのをかなりためらったのは、東京へ着くのが半日ほど遅れるからではなかった。鶴来から汽車で三十分と離れていない金沢に、父の治忠が家政婦を相手にひとりで暮しているというのに、その父には会いに行こうとしない自分を、自分でも意識し、もしかすると、他人にも知られるかもしれないのが気重だったのである。竜起は裁判官だった父を今でもまだ心の中では許していないかった。竜起が数え年九つの年、父は母を離別し、母はそれっきり竜起の前に姿を現さないまま結核で死んだ。離婚の真相は極く一部の身内の者しか知らない。それも母の方に落ち度があったと認めたからか、一族の中から父のやり方を非難する声を竜起は今までに一度も聞いたことがなかった。しかしたとえどのように父に理があるうとも、満八歳の子供から母をとりあげていいということにはならない。

鶴来駅を下りて、本町通りを祖母の家の方へ向った時も、折からかなり吹雪き出したのを幸い、竜起は、外套の襟を

立て、顔を俯き加減にして足早やに歩いた。いつ何時竜起の顔を知っている人に出会わぬものでもない。或いは雪に閉じこめられて退屈し切った人々が家の格子の隙間から道行く人を眺めていて竜起が鶴来へ下りたことを嗅ぎつけるかも知れぬ。するともう三、四日後には、金沢の長町の父の家に大して用事もなさそうな客が立ち寄り、「竜起さん、こないだ鶴来へおいでたようながやけど、こちらへも寄りなされたが」などと注進に及ぶに違いないのだった。

祖母のいるのは、竜起の伯父に当る正次郎という人のやっている「福源」という呉服屋だったが、時ならぬ竜起の訪問を受けると祖母が仕事で出ていた伯父を呼び返しに小女をやり、凍りつくような縁側から障子一枚内側の大きな暖い居間の炬燵で、伊万里の皿に山盛りに作られた刺身で酒が出された。

「一晩も泊っていけんが」

伯父が残念そうに尋ねた。

「はあ、明日からもう会社へでなければなりませんので」
「金沢のお父さんのところへは、寄ってあげんの？」

祖母は竜起から一瞬、視線をそらしながら言った。

「この次、また出なおります。金沢かここどちらかし時間的に寄れなかったんですから。父には言わないでおい下さい」

父は今になって報復を受けているのだ、と竜起は答えな

がら思ったのだった。六時間が瞬く間に過ぎると、竜起は又伯父の家族に見送られて、寒い店のあがり框で重い長靴をはいた。明日からはこんなとどたした靴をはいたり重ね着をしたりしなくても済むのだと思うと、急に竜起には東京へ帰る実感が湧いた。

汽車は福井発の上野行きで、すでに二十分延着したせいか、かなり混んでいた。それでも、竜起は、三等の客車の出入口に近い通路際にいち早く席を見つけ、汽車が動き出すや否や、緊張が一時に弛んだように眠った。間もなく彼は前の座席の人々が彼の膝を小衝きながら通路へ出て行くの目を覚したが、そのために改ってはっきり眼を覚そうとは思わなかった。汽車が何度モレールのポイントをつつ切って構内に入り、すれ違ふ蒸気機関車の喘ぎの中で停ると、拡声器が「金沢！ 金沢！」と眠たげな声で呼んだが、それを聞かなくても、竜起にはそれが金沢だということとは既に気配でわかっていた。それは父の住む町であり、この雪にも拘らず、父が万が一、誰か知人でも送りに駅へ来ていて顔を会わす破目になるのを恐れたからこそ、彼はずっと通路際の席で眠っていたかったのである。

再び彼の膝が微かに小衝かれた時、竜起は薄目をあけて鮮やかな緑色のコートの裾と、ナイロンの靴下をはいた細い脚とが窓際の席に着くのを見たが、それ以上ははっきりとその人物を見定めることは止めてしまった。ひとつには、汽

車が金沢を完全に出はずれてしまふ迄、彼は目を開けてはいけな、と自分の心に命じていたからだ。そして、駅から乗りこんで来た男たちの説の強い、傍若無人の会話を聞いているうちに、夜明け前に起きて寝不足だった竜起は、再び深い眠りに陥った。

どれだけ経ったかわからない。彼が目を開けたのは、寒さのせいだった。彼がはっとして目を開けると、前の座席の窓際に坐っていた緑色の外套の若い女は、じつと外を見つめていた。外と言っても、闇の中を走る汽車の窓ガラスは、車中の乗客たちのさまざまな寝姿を映し出すばかりだった。竜起が鏡代りの窓を見つめると、中で女との視線が合った。すると女は電氣に撃たれたように、はっと目をそらせた。

竜起はその出会いが何となく楽しかった。追いつめて行けば、いつか生身の女の眼と眼を合わせられるかも知れない。しかし、その追いかけてこころをおもしろがるには、竜起はまだ年の割りに生ぶであつた。彼はその女から視線を避けて、彼のすぐ前に、やはりいつの間にか乗りこんで来ていた、もう一人の若い娘の顔を見た。すると彼女が待ち受けていたようににっこり笑つたので、竜起は慌てた。汽車はかなり速度を落していたが、やがてびたりと停つた。

竜起は腕時計を見ることで我に還つた。まだ八時半である。しんとした車内の向うから、欠伸と赤ん坊の弱々しい

泣声が聞えた。

「ここはどこや」

男の声が言つた時、風がおおるように車体を吹きあげ、小さなつぶてになつた雪を窓に叩きつけて寄こした。隙間風が口笛のような音をたてて吹きこんで来るにも拘らず、窓際の女は、竜起と目が合わないように、斜前方を見つめたまま身動きもしないのだった。

二十七歳の三雲竜起は、目の前の若い女が一人ではなく、いつの間にか二人にふえていることに軽い当惑と楽しさを覚え、何気ない視線の往復の中で、二人を観察せずにはいられなかった。

通路側にいつの間にか腰かけている娘は、野暮ったい茶色の粗末な外套を着ていた。足許を見ると、肌色の木綿の靴下をはき、紺色のゴム長靴をはいている。髪はバーマネットをかけていたが、セツトはばらばらに乱れて、しかも鬘のように揺つた髪を殆んど気にもとめていないらしい。窓際の娘はまだ同じ姿勢を変えなかった。黒いリボンで長い髪を後で結び、尻尾のように毛先を垂らしている。きちんと揃えた爪先まで、つけこむ隙がないような感じであつた。竜起は二人を比べて茶色の外套の娘のほうが、二、三歳も若いかと思ひ、次の瞬間には、彼女のまるまるとした毛深い、色の浅黒い顔立ちが若く見えるだけであつて、実はもう二十五を過ぎていゝるかも知れない、と思ひなおし

たりした。それに彼女は竜起の視線を少しも拒まなかったばかりでなく、むしろ意識的に待ち受けているようですらあった。二、三度彼女と目が合う度に、彼はたじろいで慌てて目をそらせ、次に本当に彼女の微笑に捕えられた時は、すっかり観念したような気持になった。そしてその柔かな無防備に近い優しさはすっかり竜起の気持をほぐした。

「今何時？」

茶色の外套の娘が尋ねた。

「八時三十四分です。今、どの辺かな」

「さつき能生^{のうせい}というところを過ぎたわ」

汽車は又のろのろと走り出した。それにしても、この娘は何という哀れなオーバーを着ているのだろう。それは言い方を変えれば、綿埃^{わたご}を毛玉にしたような弾力性のない粗末な生地で作られていた。鮮かな色を着れば、人間まで美しく見えるという訳ではない。しかし終戦直後ならいざ知らず未だにこのような薄汚い織物が作られているということに、三雲は新たな驚きすら覚えたのだった。

汽車はやや本格的に走り出したかと思うと、すぐ又、速度を落し、そのようなことを数回くり返しているうちに、再び無限の静寂の中に停り、やがて急に電燈が消えた。一瞬、残像現象のように、竜起の網膜に焼きついて残ったのは、緑色のコート^{コート}の娘の横顔であった。車内には軋^{しん}が聞えている。それが静まる瞬間に、比較的近いところから、湿

った海鳴りの音が轟いていた。色の白いほうの娘の顔だけが、白抜きになって目に残った單純さを、竜起は暗闇の中で楽しんだ。そして何秒か経った時、闇に馴れた竜起の眼に、真先にほのぼのと見えて来たのは再び窓際の娘の顔であった。それは娘の肌の白さのためだけではなく、外に展開していた荒々しい雪の夜の、どこからともなく漂って来る妖しい光の為だった。汽車は今、吹雪の中で、浸蝕されて瘦せ細った海の切岸に停っているらしかった。海と空は渾沌と傾^{かた}れ落ちている雲のような暗い塊と馴れ合ってけじめもつかなかった。ほのかなセビヤ色の堆積になって波に洗われている砂浜が怒濤の下で身悶えていた。そして奇怪なことに、汀から少し離れた岩のあたりで、海は朦々^{もろう}と湯煙のような水蒸気をあげていた。

それを見ていると竜起は背筋に寒気を覚えて、思わずジャンパーの襟を立てた。

「寒い？」

その問いは茶色の外套の娘の声で自分に向けられたものだと知った時、竜起は雪明りの中で白く輝いている娘の眼に向って素直に答えていた。

「少しね。眠ってたら寒くなったんでしょ」

「あなたは？」

彼女は隣の緑色のオーバーの娘にも尋ねた。

「私は大丈夫です」

その時、ぱっと電燈がついた。三人は視線を合わせていた。

「私、角巻持つてるの。皆で膝かけにしましょうよ。道中、長いんですもの」

その老成したものの言い方に、初めて竜起はみじめな身なりの娘の苦さを感じた。立ち上った彼女は背が低くて、中指の先が、やっと網棚の端を支えている木製の棒に届くだけだったので、竜起は木綿の風呂敷に包まれた荷物を下すのを手伝ってやった。中からでて来た紺色の古びた角巻には、所々に藁屑がついていて、更にその中からは、新聞紙に包んだ赤ん坊の枕ほどのものが転り出た。

「高岡のお祖母さんがお握りもくれたのよ。角巻なんていらないって言うのに、途中寒いかも知れないからって、こうして持たせて寄こしたの」

「持ってたほうが、いいと思うな。この分じゃ汽車は遅れるに決ってるし」

「そう？ 遅れると思う？ 雪に降りこめられたら嬉しいな、私、早く帰らなきゃいけない理由なんて何もないんだもの」

彼女はそう言いながら、ごみだらけの角巻を三人の膝の上に投げかけた。偶然、竜起の手許におかれた部分には、茶色のコートの娘の体温のように、一際明瞭な温もりが残っていたが、それは恐らく握り飯が包まれてあった所に違

いなかった。

「このあたりには、雪崩の出やすい所があるから、もう少し動いて欲しいな」

竜起は娘たちを少し威かしてみたくなった。

「ここが？」

茶色のコートの娘は、大きな眼を見張った。

「私たち埋まるかも知れないの？」

「運が悪ければね。でもそんな劇的なことはめったに起らないから」

「死なないんなら、私一晩くらい埋ってもいいわ」

竜起は、この娘の雪崩についての無知を敢えて指摘しようとも思わなかった。彼女が雪崩の予感に新しい感動を発見したとすれば、それをそのままとっておいてやりたいと思ったのだ。

「食べものはあるし、角巻の中で、皆して体を寄せ合えば、凍え死にするほど寒くはないと思うの。朝になったら掘り出されるの、悪くはないわ。あなたは？」

娘は無邪気に、隣の緑色のコートの女に言った。その質問があまり急だったので、相手は少したじろぎ、その結果、自分の心をとりつくりう隙を失ったように見えた。

「私、死んでもかまいません」

「それは、凄い」

竜起は思わず呟いてから、卒直すぎる言い方が相手を傷

つけはしないかと怖れたが、その当惑を、茶色のコートの娘が苦もなく救ってくれたのだった。

「あなた、奥さんでしょ」

緑色のコートの娘の態度に僅かな衝撃の手答えがあったことを、三雲は感じた。

「どうして？」

「うん、只何となくそう思っただけ。ごめんなさいね」
緑色のコートの娘は相手を扱いかねたのか黙ってしまった。

「奥さんなら、死んでもいいという訳がないよ。独身者なら、どうなってもかまわないかも知れないけど」

「あなた独身？」

茶色のオーバーの娘は、好奇心に輝いた目つきで竜起に尋ねた。

「子供が五人いる——」

「嘘よ、嘘だわ」

汽車は申しわけばかり動いた。

「あなたは、金沢から乗られましたか？」

ほっておけば、ずるずると茶色のコートの娘とばかり親密の度合いが深まりそうになるのを怖れて、竜起は窓際の娘に話しかけた。

「はい、私、金沢大学の学生です」

後の方の部分は、先刻の会話に対する答えのつもりらし

い。

「そう、いいわねえ」

茶色の外套の娘は、大きな溜息をついた。

「私ね、三浦三崎に伯母さんがいて、そこで育てられたの。お父さんとお母さんが深川の空襲で死んじゃったから。伯母さんは、ちょっとした女実業家なの。美容院を経営してるんだけど、その癖、考えることは古いんだから。女は学問なんかしない方が、早く結婚できるっていうの。でも、私も実は少しはそんな気がしてるの」

「それならいいじゃないか」

竜起の言葉には、とりようによっては突き放すような冷たさを感じたかも知れないのに、彼女は少しも意に介してないらしく喋り続けた。

「伯母さんの店はね、海のすぐ傍なの。魚の匂いの嫌いな人なら駄目だわ。すぐ前が鰯船の船溜りになってるんだから。城ヶ島がすぐそこで、海は少し、油が浮いて汚いけど、でもお日さまは強くてきれいよ。私、南の国が好き」

稚拙な言い方の中に、竜起は却って彼女の住んでいる場所を容易に想像することができるよう気がした。漁船のベンキやグリースの匂いが、船溜りの陽にあたためられた空間にゆらりと立ちこめている。青空を映すには、油の浮いた水が最も強く鮮かだ。その海岸の道を、膝の出たズボンをはいたこの娘が、ばさばさの髪を風に吹き散らされな

から走って行く……

「三浦三崎の方へ遊びに来ることない？」

娘は人懐っこげに言った。

「行きたいなあ。暫く北陸に閉じ籠っていたら、太平洋を見なくなったなあ」

竜起は名刺を取り出しながら言った。

「名刺は、五条方作業所になってますけど、これからは自分、本社勤務になります」

彼は名刺を一枚ずつ娘たちに渡した。三崎の娘に渡す時は何とも思わなかったが、女子学生に渡す時、彼は名刺を無理やりに相手の手に滑りこませたような気になった。

「私に名刺、もう一枚頂戴」

三崎の娘は竜起にねだると、手下げの中から小さな赤い手帳を出し、その鉛筆で、自分の住所氏名を、思いの他、薄い、小さな力ない字で書きそえて返した。

「読める？」

「颯田善江、さん」

「私、字が下手だから」

善江は、羞らいを見せた。

「私、徳永と申します。私も名刺を持っておりませんので」

女子学生は、やや堅い調子で言った。彼女は颯田善江が膝の上にかけてくれた角巻を、早くも自分の場所だけ少し

ずらすことによって、中で三雲と不用意に体がふれあう機会を避けているように見えた。

「大学では、何を勉強してるんですか」

「国文です」

竜起は遠い昔のことになった学生生活の、季節的なリズムを思い出していた。今は最も羽根ののびせる時期にさしかかっているのだ。二月二十日をすぎると、学年試験がほぼつ終る学生もいる。竜起の世代は終戦で交通機関が混んでいて旅行どころではなかった。しかし、今もし自分が学生だったら、必らず旅に出たろう、と竜起は思い返した。

汽車は、相変らず喘ぎながら走ったり、暫く停ったりした。緑色の毛羽の抜けたブラシ天の三等の座席の背の固さが背骨にこたえるらしく、善江は間もなく「ごめんなさいね」と言うのと、立ち上って雨靴を脱ぎ、座席の上に正座した。

間もなく、車掌が入って来て、この先の谷浜の近くで除雪車が動いているため、汽車が待たされているのだと告げた。

「大変長らくお待たせしておりますが、もう少々御辛抱下さい。それから徳永容子さん、いらっしゃいましたら、電報が来ております」

緑色のコートの娘は、突然立ち上って手をあげた。それ

はいかにも学生らしい、教師に質問をする時の態度と似ていた。

「私、徳永です」

「どうも、お渡しするのが遅くなってすみませんでした。

実は富山で受けていたのですが、この雪でダイヤが乱れましたので、係の者と連絡が不行届きになりました」

車掌は言い訳をした。

「いいえ、よろしいんです」

徳永容子は、電文を開いて、ちらりとそれに目を通した。しかしそれがほんの一時という訳にはいかなかったのは、電文がかなり長いものだったからしかなかった。彼女の顔は次第に乾いた能面のようにになった。

「どうかしたの？ お父さんでも病氣？」

颯田善江が徳永容子の顔を心配そうに覗きこむのを、容子は我慢して耐えているというふうに微笑して見せた。

「いいえ、そうじゃないんです」

「親のある人は、電報ってきくと、どきっとするんですってねえ。でも私なんか『チキキトク、スグカエレ』なんて電報が来たら、どんなにいいだろうと思うの。どんな遠い所にしても、お金がなくても、私とんで帰るわ。皆から借金して、お父さんの好きな食べ物持って汽車に乗ってとんで帰るの。そして死ぬまで、撫でたりさすったりして、寝ずに看病するわ。そんなのいいわねえ」

三雲竜起は、その間に、徳永容子の表情に現れた変化を観察せずにはいられなかった。容子は善江の言葉に煩わしく思っているようには見えなかった。彼女は自分の思いの中に閉じこもり、外界との間を透明なガラスで遮断しているようだった。その眼は竜起の肩のあたりを凝視してはいたが、瞳は何も吸収せず、真空の柵のように彼女の心の領域に立ち入ろうとするものを拒んでいるかに見えた。今まで電報を握りしめていた指さえ、今は固く開かれて、折りたたまれた紙片は、容子の膝近くまで滑り落ちていた。

「寒くなったわねえ、あなた寒くない？」

徳永容子が、石のようになっていたことを善江は本能的に知ったらしく、心を許して竜起を自分ひとりとの相手にし始めた。

「大丈夫です。さっきの方が寒かった」

「お握りいりません？」

「もう少し経ってお腹が空きそうだったら、ごちそうして下さい」

その時、容子の視線は現実の世界に戻って来た。それは弱々しい疲れた表情になり、やがて何も知らない二人の前に身を曝していることに耐えられなくなったらしく、「すみません、ちょっと通して下さい」と言いながら、立ち上って角巻を善江の膝に預けると、彼女は蹣跚と通路にで行った。